

<3歳クラス I期 5月>「安心して好きなことを楽しむ姿を支える」

これまでの保育の様子

入園して園生活が始まるI期は、安心感を第一にしている。遊ぶ楽しさから園生活に慣れていけるように、3歳保育室の目の前にある砂場には、プラスチック製の電車やシャベルなどを置いたり、小さめの砂山をつくっておいたりした。また、なべや皿などの料理道具を近くのテーブルに置き、すぐに遊び出せる状態にすることで、外遊びに興味をもてるような環境構成を行っていた。

4月中旬、3歳クラス児は固定遊具や乗り物で遊んだり、池でオタマジャクシを捕まえたり、教師と手をつないで園内を散策したりとそれぞれのペースで遊んでいた。4月下旬には、中央砂場で5歳クラスの雨どい遊びに仲間入りし、裸足になって砂場で遊ぶ幼児もいた。3歳保育室前のテーブルで料理をして遊ぶ幼児はいたが、3歳クラス前の砂場で遊ぶ姿は少なかった。同じ時期、他園を参観する機会があった。そこでは、3歳クラス児が砂場で型抜きをしたり料理をつくったりして、一人一人が穏やかに遊ぶ姿が印象に残っていた。

5月2日

3歳保育室テラスでA児とB児の2人で絵本『ミック』を見ている。B児が生き物探しに出かけるとA児は砂場に行く。

A児：「宝探しだよ」プラスチックスコップで砂を掘り始める。

担任：「へえ。たのしそうだね。何か出てくるかな」

A児：「これだよ」横に置いてあるキックバイクを示す。

担任：「なるほど、これが宝なんだね」

A児：「うん」

4歳クラスa児：「手伝うよ」一緒に穴を掘っていく。

穴が深くなっていくと、底から水が染み出してくる。

4歳クラスa児：「あ！水が出てきた！」

A児：「見たい」穴をのぞき込んで、じっと見つめる。

担任：「おもしろいね。お水が出てきたね」

4歳クラスa児がいなくなると、A児は掘った穴にシャベルを埋めたり掘り返したりする。

この日、砂場で遊ぶA児を見かけた担任が近くへ行くと、A児から「宝探し」という言葉が出た。登園してすぐに『ミック』を見ていたので、砂に何かを入れて探し出すイメージなのだろうと捉えた。4歳クラス児が砂場からいなくなっても、A児は砂場で遊び続けていた。この砂場は3歳保育室の目の前にあり、担任や副担任等の保育者が近くにいる様子を見守ったり言葉をかけたりしやすい場所である。3歳クラス児にとって、保育室に近く安心できる空間である。この日、A児が長く遊び続ける様子を見て、A児にとって砂場が安心して過ごせる場であり、砂を掘ることに今の楽しみがあるのではないかと考えた。翌日から、登園前の環境構成では、前日の遊びが思い出せるように掘った穴をそのまま残しておくことにした。

ゴールデンウィークが明けた10日の水曜カンファレンスで、他園を参観したことを話題にした。穏やかに遊ぶ姿を支えているのが保育者の丁寧な援助とともに砂遊びの道具が十分にあり、種類が豊富なことにあるのではないかと話した。A児らが最近、砂を掘って宝探しをしていることも話題に出すと、他の職員から、今の3歳クラス児にあった道具を見直したらどうかという提案があった。カンファレンス後に道具がしまっている物置を全職員で見に行くと、プラスチック製の熊手と柄の短いミニスコップが見付かった。副担任と相談し、熊手とミニスコップを3つずつ、テラスの道具入れに付け足すことにした。

5月11日

登園前に砂場にミニスコップと熊手を1つずつ置いておき、砂を少しだけ掘っておく。登園後の仕度を終えた4歳クラスb児c児が、砂場に来てミニスコップと熊手を使って穴を掘り始める。仕度を終えた数名の3歳クラス児も砂場へ向かう。

4歳クラスb児：「だめ。使わないで！」ミニスコップを取り返す。

担任：「あら、どうしたの」

4歳クラスb児：「これ、私のはじめに使っていたの」

担任：「そうだったのね。Cちゃんは、どうしたいの」

C児：「私も、使いたい」

A児：「ぼくも」

担任：「あっちにまだあったと思うよ。一緒に探しに行ってみますか」

A児C児：「うん」 砂場遊びの道具入れを教師と見に行く。

A児：「これ！」

担任：「このかごの中なら、誰でも使えますよ」

A児は熊手、C児はミニスコップを持って砂場へ戻り、砂をかき分けて遊ぶ。

新たに付け足した道具に真っ先に気付いたのは4歳クラス児だった。4歳クラス児の姿がきっかけとなり、複数の3歳クラス児が砂場で遊び始めた。ミニスコップを取り合う場面があったが、この時期は、貸し借りの仲介ではなく、自由に使える道具があることを知ることが安心感につながると判断して援助した。A児やC児が必要とするタイミングで道具の場所を知らせ、自由に使ってよいことを伝えると、A児は、熊手を両手にもって砂をかいたり、ミニスコップに持ち替えたりして、長い時間、遊んでいた。振り返りタイムでは、これまでに使っていたプラスチックシャベルに比べて、熊手やミニシャベルは手元が見えやすく、しゃがんだまま砂を掘ることができ、3歳クラス児にとって扱いやすい道具であると共有した。翌日から、熊手やミニスコップを砂場に置いて、登園してすぐに遊び出せるように環境を構成していこうと話し合った。

5月19日

A児：「宝探ししようよ」 副担任の手を引く。

副担任：「宝探し？いいねえ」

A児は、砂場へ行き、ミニスコップで穴を掘っていく。

A児：「水、入れよう」 バケツを持って水道から水を出し、掘った穴に入れる。

副担任：「お水がたまったね」

A児：「ベンチを入れたい」 4人用のベンチが置いてあるところへ行き、ベンチを押す。

A児：「動かない」

副担任：「Aちゃん、こっちにもベンチがありますよ」 2人用のベンチを示す。

A児：「それにする」

A児がベンチを押すと横倒しになる。A児は押して倒すことを繰り返しながら、砂場の穴まで運ぶ。

副担任：「やった、入ったね」

A児：「うん」

登園後の仕度を終えると、A児は毎日のように砂場に向かっていった。この日、担任がグラウンドから砂場に戻ると、砂場の中にベンチが入っていて不思議に思った。振り返りタイムでA児の遊びを情報共有し納得した。A児の「ベンチを入れたい」という思いを肯定的に受け止め、A児が試す様子を見守ったこと、A児の力でベンチが運べないとき、他にもベンチがあることを知らせたことを共有した。

穴を掘ることに加え、何かを運んで穴に入れたいという姿は、次にしたいことが見付かり、安心して遊んでいる姿と捉え、A児の思いを受け止めて援助していこうと援助の方向性を話し合った。

翌日以降、A児は穴を掘り、掘った穴にリヤカーや3人乗りバギーなどが入るか試し、穴が小さいとそれが入るくらいまで穴を大きく掘って遊ぶことを繰り返すようになった。

5月29日

週末からの雨で砂場に大きな水たまりができています。A児が水たまりの中に足を入れる。

A児：「深い」

担任：「本当だ。深いねえ」

A児は、ままごと道具を入れるワゴンを押してきて、水たまりの中へ入れる。

A児：「動かない」

A児がワゴンを引っ張っていると、D児が来て、ワゴンの反対側から押す。

教師：「Dちゃん、手伝ってくれるの？Aちゃん、これで動くかな」

A児とC児でワゴンを押すと少し動く。A児は熊手を手に持ち、タイヤの周りの砂をかき出す。

A児：「先生もやって」

担任：「いいよ」一緒に砂をかき出す。

B児：「何やっているの？」

担任：「ワゴンが動かなくなって、砂を取っているの」

B児：「ぼくもやるよ」

E児：「私もやりたい」

A児B児E児で砂をかき出して、ワゴンを押すと、水たまりからワゴンが抜け出す。

担任：「すごい。よかったねAちゃん」

A児はうなずくと、ワゴンを押して、砂場の枠の外まで運び出す。

同じ砂場であっても、気象状況によって、砂が乾いていたり、大きな水たまりになっていたりするのが外遊びの面白さの一つである。この日、A児はまず自分で水たまりの中に入ると、テラスに置いてある遊具や道具の中から一番大きいワゴンを持ってきた。大きな水たまりに自ら入ってみて、そこに大きなワゴンが入るのか試したいと思ったのではないかと読み取った。

A児の真剣な様子に3歳クラスの友達がやってきた。これまでA児の砂場遊びは、教師が近くで見守ったり教師や年上の幼児と一緒に遊んだりすることがほとんどであった。周りの友達の存在を知る時期に、A児の遊びに友達も加わり一緒に遊ぶ楽しさを味わうことが、これからのA児の育ちにつながることを願った。そこで、教師も遊びに加わりながら、友達と一緒に力を合わせてワゴンが動いた達成感が味わえるような言葉をかけた。一緒に遊んでいた時間は短い、A児にとって好きな遊びをしている安心感があることで、友達と一緒に遊ぶ楽しさにもつながっていくのではないかと捉えた。

考察

園生活が始まるI期は、園での遊びや生活、教師、場所、友達に慣れることを願い、安心感を第一に援助してきた。幼児が何に興味があり、どこで遊んでいたのかなど、日々の振り返りタイムで共有しながら、翌日以降の援助や環境構成に反映していった。その中で、4月下旬に他園を参観したことがこの時期の砂場の環境構成を捉え直すきっかけとなった。例年の3歳クラスでは、砂場でプラスチック製の電車を走らせて遊ぶ幼児がいたことから、砂場に電車を置き、砂山をつくって電車を走らせられるようにしていた。しかし、目の前にいる3歳クラス児にとって興味をひくものではなかった。これまでの保育経験をもとに入園式前に準備した道具の中から砂場の環境構成をしていたが、宝探しのイメージで砂を掘ることはつながっていないように思えた。しまつてある道具を見直し、A児の今の楽しみに適した道具を置いてみることに環境を更新した。その後のA児の姿を振り返ると、砂場で遊ぶことから一日をスタートし、砂を掘ること、掘った穴に入りそうなものを入れてみる、入れた道具を穴から脱出させることへと好きなことを見つけて試すようになっていった。熊手やミニスコップは扱いやすいものであったことも、遊びが続く支えとなったと考える。

A児が掘る穴は大きくなり、穴に入れるものも多岐に渡った。昨年度まで、砂場の中に乗り物や、ワゴンを入れる遊び方はあまり見られなかった。砂場は乗り物を乗る場所ではないことを伝えて止めるように声をかけた方がよいのか考えた。しかし、A児がやりたいことは、掘った穴に乗り物などが入るのかを試すことだろうと読み取り、担任も副担任も安全面に配慮しながら、A児がやりたいことを試せるように見守った。A児にとって好きなことを思う存分試せる環境や教師がA児の遊びを肯定的に捉えて見守る援助が安心感につながったと考える。

5月末、砂場の縁を熊手で掘り進めるA児がいた。近くにいくと「これを取りたいんだ」と砂場の枠のブロックを指さした。砂を掘る道具の種類が豊富になったことで、次にやりたいことが見付き、好きなことを試す楽しさにつながったと考える。